

【前置き】

この文章は、鎌倉時代に成立した物語「いはでしのぶ」の一節です。院(上皇)の娘であり内大臣の妻である一品宮は、ある誤解がもとで院の別邸に籠もってしまいました。内大臣は彼女と会うことができずにいます。

【本文】

「ただ今何事をいかにしてかおはしますらむ。さすが思し出づることも、などかながらむ」など、うち返し思し続くるも、なほあかねば、「小夜更け、人静まりて、あながちにとがむる人あらじを、大淀ばかりの慰めにも、かの院の方様へ①(おもむきやせまし)」と、にはかに思し立ちで、出でむとし給ふに、若君の目を覚まし給へば、「あな【A】」とはのたまふものから、ついみ給ひて、「宮の御迎へに参りて、具し奉りて来むよ」と聞こえ給ふに、さばかり慕ひ給ふ人の、うちうなづきて目をすりつ、「それまでは寝入らじよ」とのたまふも、いみじくあはれにて、「今、その折は起こしもしてむ。とく寝給へ」とて、袖の暇なげにおし拭ひつつぞ出で給ふ。

御供には、ただ少納言某一人、さらでは、何なるまじきあやしの者どもばかりにて、御馬にておはするに、川原のほどなどは、やや更けにけるを、雪は行く先も見えず降りまよひて、風は激しき夜のけはひ、いともの恐ろしきに、ただ見まくほしさにいざなはれつつ、むなしく帰らむ道の空も、さすがはづかしう思し知られて、

古へのたぐひも知らじいたづらに逢はでしばらむ布留の中道

②(かやうにて)おはしそきぬれば、忍びて大納言の君に消息し給へるに、母の按察使の乳母も出でて大人しき人もなき折から、いとど忍びがたきにや、「ことの聞こえあらば、わづらはしかるべきことかな」とは思へど、山に向かひたる曹司の、ことに人離れたる方なるを、何にとなき様に紛らはして、「ただここもとに」と聞こえたるは、人悪くうれしくて、おはしましもかたじけなきに、「さてもや」とばかりにて、のたまひやりたることもなく、むせかへり給へるを、見奉る心の中も、いと堪へがたう、まづかき暗されて、胸にもあまり、言の葉にも堪へぬ日頃の有り様を、誰もただ押し込め、なかなかなれど、③(言ふかひなき御ながめよりは、こよなくかかり所ある心地、いかでかし給はざらむ)。ただ今思ひ立ちつるほどの有り様、若君ののたまへることどもなど語り給ひつつ、「憂き我からは、これをだに思し出づることも無げなるを、人知れぬ片思ひこそはかなけれ」とて、押しあて給へる御袖の重、信田の森の露よりも隙なく見ゆるに、「言には出でねど、さすが折々、思し入れたる御氣色の心苦しさ」など、よきほどにうち泣きつつ語り聞こゆれば、「何と、こは。偽りしげうのたまひなすぞ。④(さすがあはれとも思さましかば、一行の無げの言の葉をも、などかかけさせ給はざらむ)」と、深き恨みにつけても、かつ忘られぬ心弱さは、「ただ夢ばかりにても、御あたり近うて、身の怠りも、人のつらさも、聞き明らめたきを、かまへて、いかにまれ、たばかり給へ。さすが院なども、つとは添ひものし給はじものを」と、泣く泣く責め給へば、「それこそいかにもかなふべしとも覚え侍らね。院・後の宮も、この御方につとのみおはしませば、いつの隙にか、さばかりのことも侍らむ。また、いかばかりのことなりとても、思しめし明らかに聞こえさせ給はむこともありがたうや」と答ふるも、げに⑤(さる御本性)ぞかしと、いと恨めしくて、「たとへば、その怠りは、空に糺の神あらば、明らむる方もありなむ。ただ、今ひとたびの対面なくて、ゆくへも知らず、むなしき空に消えなば、人の御ためまで、罪重からずしもあるじ」など、果て果ては、ゆゆしげにさへのたまひなす。

(「いはでしのぶ」による)

(注)

○大淀ばかりの慰めにも=「大淀のみるめばかりと慰めてこむよのあまといかでならまし」(「定頼集」)をふまえた表現。「遠くから見るだけの慰めでも」の意。

- かの院=一品宮が籠もっている院の別邸。
- 若君=内大臣と一品官の子。
- 古への……布留の中道=「石上布留の中道なかなかに見ずは恋しと思はましやは」(『古今和歌集』)をふまえている。
- 大納言の君=一品宮の乳母の娘。
- 按察使の乳母=一品宮の乳母。
- 曹司=部屋。
- 信田の森の露よりも隙なく見ゆるに=「過ぎにけり信田の森のほとぎす絶えぬ雲を袖に残して」(『新古今和歌集』)をふまえた表現。
- 后の宮=一品宮の母である中宮。
- 空に糺の神あらば、明らむる方もありなむ=「いかにしていかに知らまし偽りを空にただすの神なかりせば」(『枕草子』)をふまえた表現。

【問題】

問一

傍線部①「おもむきやせまし」の文法的説明として、最も適当なものを一つ選びなさい。

解答番号 [21]

1. 名詞「おもむき」+助詞「や」+サ行変格活用の動詞「す」の未然形+助動詞「まし」の連体形
2. 名詞「おもむき」+助詞「や」+助動詞「き」の未然形+助動詞「まし」の終止形
3. 四段活用の動詞「おもむく」の連用形+助詞「や」+サ行変格活用の動詞「す」の未然形+助動詞「まし」の連体形
4. 四段活用の動詞「おもむく」の連用形+助詞「や」+助動詞「き」の未然形+助動詞「まし」の終止形

問二

空欄 [A] を補うのに最も適当なものを一つ選びなさい。

解答番号 [22]

1. いぎたなし
2. かまびすし
3. むつかし
4. ゆかし

問三

傍線部②「かやうにて」の「かやう」が指示示す事柄に明らかにあてはまらないものとして、最も適当なものを一つ選びなさい。

解答番号 [23]

1. 人目につかないように、夜が更け始めてからこっそりと出発したこと。
2. ふさわしい従者がいないので、少納言某一人だけを伴っていること。
3. 吹雪という悪天候の中、一品宮に会いたい一心で向かっていること。
4. 一品宮に会えなかった場合の悲しさを思いながら向かっていること。

問四

傍線部③「言ふかひなき御ながめよりは、こよなくかかり所ある心地、いかでかし給はざらむ」とは、どのようなことを言っているのですか。最も適当なものを一つ選びなさい。

解答番号 [24]

1. 大納言の君は、一人でとるに足りない問題に思い悩んでいるよりは、内大臣と話している方が少しは気が紛れるように感じたということ。
2. 大納言の君は、涙で声を詰まらせる内大臣を見ているうちに、なんとか彼を落ち着かせたいようと思つたということ。
3. 内大臣は、何も言わない大納言の君を見ているうちに、何となく彼女のことが信用できないように思つたということ。
4. 内大臣は、一人でどうにもならない物思いにふけっているよりは、この別邸にいる方がこの上なく頼りがいがあるように感じたということ。

問五

傍線部④「さすがにあれとも思さましかば、一行の無げの言の葉をも、などかけさせ給はざらむ」の解釈として最も適当なものを一つ選びなさい。

解答番号 [25]

1. 一品宮が若君のことをさすがに懐かしくお思いになるなら、あらん限りの慰めの言葉を、どうして若君にかけて下さらないのか。
2. 一品宮が私のことをさすがに不憫だとお思いになるなら、心のこもっていないわざかな言葉でさえも、どうして私にかけて下さらないのか。
3. 大納言の君が一品宮のことをさすがに気がかりにお思い申し上げるなら、ささやかな忠告の言葉でさえも、どうして一品宮におかけ申し上げないのか。
4. 大納言の君が若君のことをさすがにかわいそうにお思い申し上げるなら、定期的に安否を尋ねる言葉を、どうして若君におかけ申し上げないのか。

問六

傍線部⑤「さる御本性」の説明として最も適当なものを一つ選びなさい。

解答番号 [26]

1. 院は、生来どんなことでもなかなか納得しない、気難しい性格だということ。
2. 内大臣は、生来物事を分かりやすく説明できない、口下手な人物だということ。

3. 大納言の君は、生来自分の意見を変えようとしない、強情な人物だということ。
4. 一品宮は、生来自分の胸の内をはっきりと言わない、ひかえめな性格だということ。

問七

この文章の内容に明らかに合致しないものを一つ選びなさい。

解答番号 [27]

1. 若君は、いつもは内大臣のそばを離れたがらないが、彼が一品宮のもとへ向かう時、家で待っていることを選んだ。
2. 大納言の君と按察使の乳母は、突然訪ねてきた内大臣を追い返すこともできず、ひそかに部屋に招き入れた。
3. 内大臣は、本来であれば自分の身分にはふさわしくない、山に面して人気もない場所にある部屋に案内された。
4. 内大臣は、このまま一品宮に会えずに自分が死んでしまったら、彼女にとって重い罪となるだろうと言った。

問八

「いはでしのぶ」は鎌倉時代に成立したとされる作品ですが、鎌倉時代より後に成立した作品を一つ選びなさい。

解答番号 [28]

1. 「堤中納言物語」
2. 「正徹物語」
3. 「大和物語」
4. 「宇治拾遺物語」

【解説】

問一：文法（おもむきやせまし）

正解：3

・分析：「おもむき（動詞・連用形）」+「や（係助詞）」+「せ（サ変・未然形）」+「まし（反実仮想・連体形）」。

・ポイント：「まし」は未然形接続。サ変「す」の未然形「せ」に繋がる。また係助詞「や」があるため、結びは連体形の「まし」となる。

問二：重要語（空欄A）

正解：3（むつかし）

・分析：忍び出ようとした矢先に子供が目を覚ます場面。

・ポイント：「むつかし」は「不快・煩わしい」の意。計画が狂い「ああ、厄介だ（あな、むつかし）」という内大臣の心理を捉える。

問三：内容（指示語：不適切なもの）

正解：2

・分析：供の構成についての記述。

・ポイント：本文に「ただ少納言某一人、さらでは（それ以外には）、……あやしの者どもばかりにて」とある。「少納言一人だけ」とする選択肢2は、複数人（～ども）を連れている事実と矛盾する。

問四：解釈（御ながめよりは……）

正解：4

・分析：内大臣の心情を語り手が推測する場面。

・ポイント：「御ながめ（物思い）」は内大臣が自宅でしていた虚しい時間を指し、「かかり所（頼り所）」は今ここにいる状況を指す。敬語「給は」の主体は内大臣。自宅で悩むより、ここに来た方がどれほど頼もしい心地だろうか、という解釈だ。

問五：文法・訳（思さましかば……）

正解:2

- ・分析: 反実仮想「～ましかば……まし」の構文。
- ・ポイント: 「もし私を不憫(あはれ)とお思いになるならば、(……言葉をかけてくださるだろうに、実際はくれない)」という恨み言。構文を正確に訳している2が正解。

問六:人物(さる御本性)

正解:4

- ・分析: 一品宮(宮)がどのような性格かを問う。
- ・ポイント: 題名の「いはでしのぶ(言わずに堪え忍ぶ)」通り、自分の思いを口に出さない控えめな性格を指す。

問七:内容合致(合致しないもの)

正解:2

- ・分析: 内大臣を招き入れた人物の特定。
- ・ポイント: 本文に「按察使の乳母も出でて(外出して)、大人しき人もなき折から」とある。乳母は不在であり、大納言の君と「二人で」招き入れたという記述は誤り。

問八:文学史(時代判定)

正解:2(正徹物語)

- ・分析: 鎌倉時代(いはでしのぶ)より後の作品を選ぶ。
- ・ポイント: 「正徹物語」は室町時代の歌論書。他はすべて平安～鎌倉初期の作品。

【読解まとめポイント】

1. 選択肢における「のみ、だけ」の罠:「～だけ」という記述があれば本文の「～ども(複数)」を疑ってみよう。
2. 語句の意味の文脈判別:「出でて」を「現れて」と誤読せず、文脈から「外出(不在)」を見抜こう。
3. 「主語」判別: 尊敬語の有無、その種類から判別していこう。

【現代語訳】

「今ごろ、一品宮(宮)は何を思い、どのようにお過ごしなのだろうか。やはり、私のことを思い出されることも、どうしてないことがあろうか(いや、あるはずだ)」などと、内大臣が繰り返し思い続けなさるが、それでもやはり思いは満たされない。

「夜も更け、人の気配も静まって、強いてとがめる人もいないだろうから、せめて(遠くから見るだけの)大淀のような慰めにでも、あの一品宮がいらっしゃる院の方へ行ってみようか」と、急に思い立って出かけようとなさる。すると、若君が目を覚ましあったので、「ああ、厄介なことだ」とおっしゃるもの、その場に膝をついて座り、「宮(お母様)をお迎えに参って、ご一緒に連れ来て来よう」と申し上げなさる。

若君はあれほど母を慕つていらっしゃるので、うなずいて目をこすりながら、「それまでは寝ないで待っていますよ」とおっしゃるのも、内大臣にはたいそういじらしく思われた。「その時には起こしてあげよう。早く寝なさい」と言って、涙を拭う暇もないほどに袖で押し拭いながら、急いでお出かけになる。

お供には、ただ少納言の某(なにがし)一人と、それ以外には、何ということもない身分の低い者たちばかりを連れて、馬で行かれる。河原のあたりなどは、夜がやや更けていたが、雪は行く先も見えないほど激しく降り乱れ、風が激しい夜の気配は、たいそう恐ろしい。ただ(一品宮に)会いたいという一心に誘われて進むものの、もし会えずにむなしく帰ることになつたらその道中はどれほど情けないだろうかと、さすがに恥ずかしく思われて、次のような歌を詠んだ。

古(いにしえ)の例も知らないほどだ。いたずらに逢うことできず、この布留(ふる)の中道のように、(涙で袖を)絞ることになるのだろうか。

このようにして到着なさったので、人目を忍んで大納言の君に連絡を差し上げなさったところ、母である按察使(あぜち)の乳母も外出しており、しっかりとした分別のある人もいない時であった。(大納言の君は)ますます見て見ぬふりをするのが難しかったのだろうか。「もし(この訪問が)評判になつたら、厄介なことになるに違いない」とは思うものの、山に面した部屋で、格別に人目から離れた場所を、何でもないふうにごまかして、「どうぞこちらへ」と申し上げた。内大臣にとってそれは体裁は悪いが嬉しく、お越しくださったこともありがたいことであった。

内大臣は「それにしても(おいたわしい)」とだけ思って、言葉もかけられず、むせび泣いておられる。それを拝見する大納言の君の心中もたいそう耐えがたく、まずは悲しみに胸がふさがってしまった。胸に溢れ、言葉にも尽くせないここ数日のありさまを、誰もがただ心に押し込んでいる。かえって辛い状況ではあるが、(自宅で一人)どうしようもない物思いにふけっているよりは、この場所に来たことの方が、この上なく頼りがいがあるような心地が、どうしてなさらないだろうか(いや、感じておられるに違いない)。

内大臣は、たつた今思い立ってやって来た時の様子や、若君がおっしゃったことなどを語り続けなさって、「辛い境遇にある私からは、せめてこの若君のことだけでも思い出してくださいこともあります」などと、ほどよく泣きながら語り申し上げると、内大臣は次のように言った。「なんと、これは。嘘をたくさんおっしゃっているのだ。もし私を不憫だと思っておいでなら、たとえ一行の、そつけない言葉であっても、どうしてかけてくださらないのだろうか」

深い恨み言を言うにつけても、一方で(彼女を)忘れられない心の弱さから、「せめて夢の中だけでも、おそば近くに寄って、自分の至らなさも、あの方の薄情さも、聞き届けてはっきりさせたいのだ。ぜひとも、どのようにあっても計らってください。やはり院(上皇)なども、ずっと付き添つていらっしゃるわけではないだろうに」と、泣きながら責め立てなさる。

大納言の君は、「それこそ、どのようにも叶うとは思われません。院や后の宮も、この一品宮様にずっと付き添つておいでですので、いつの隙に、そのようなことがあり得ましようか。また、どのようなことであっても、ご自分の思いをはっきりとおっしゃるような(一品宮様の)お言葉を聞くことも、難しいことでしょう」と答える。

内大臣は、なるほど(一品宮は)そのような(胸の内をはっきり言わない)ご気質なのだなあと、たいそう恨めしく感じた。そして、「たとえば、私の過ちは、もし天に糺(ただす)の神がいるならば、明らかにする方法もあるだろう。ただ、もう一度の対面も叶わず、行方も知れぬまま空しく死んでしまったら、あの方にとっても、その罪は決して軽くはないだろう」などと、最後には、(聞いている側が恐ろしくなるほど)不吉な様子にまで、ことさらにおっしゃる。

【練習問題】

第1部：文法

問1

「～ましかば……まし」という形を見たら、どのような意味で訳すべきか答えよ。

問2：係結びの法則

疑問・反語を表す係助詞「や」「か」がある場合、文末の活用形はどうなるか答えよ。

問3：助動詞「まし」の接続

反実仮想の助動詞「まし」は、動詞の何形に接続するか答えよ。また、サ変「す」に付く場合は何という形になるか。

第2部：重要単語

問4

入試頻出語「むつかし」の、現代語の「難しい」とは異なる重要な意味を2つ答えよ。

問5

古文で「ながめ（長雨／眺め）」と出てきた際、動作としては何を指すことが多いか。

問6

「なかなかなり」という単語が持つ、文脈で判断すべき重要な意味を答えよ。

第3部：読解・解

問7：主語判定の鉄則

接続助詞「て」と「ば」のうち、前後で主語が変わりにくいのはどちらか。

問8：選択肢の「罠」

内容合致問題で、「～だけ」「～のみ」「すべて」といった強い限定表現が含まれる選択肢に出会った際、まず何を疑うべきか。

第4部：文学史

問9：物語の時代判定

『宇治拾遺物語』は何時代の作品か。また、今回の題材『いはでしのぶ』と同じ鎌倉時代の物語として有名な「擬古物語」は何か。

問10：ジャンルの識別

『堤中納言物語』は、古文史上珍しいどのような形式の作品か。

【練習問題の解説】

問1:もし～だったら……だろうに(実際はそうではない)

- 解説:「反実(事実に反する)」を「仮想」する構文！

問2:連体形

問3:未然形／せ(せまし)

- 解説:「まし」は未然形接続。特にサ変「す」の未然形は「せ」なので、「せまし」という形は入試で非常によく狙われる。

問4:不快だ、煩わしい(厄介だ)、気味が悪い

- 解説: 現代語の「difficult」の意味で出ることはまずない。感情を表す言葉として覚えよう

問5:ぼんやりと物思いにふけること

- 解説:「長雨」と掛詞になることが多いが、本質は「視線を一点に据えて物思いをする」ことにあら。

問6:中途半端だ、かえって(～の方がました)

- 解説:「中途半端に何かをするくらいなら、～の方がました」という文脈で使われる。

問7:て

- 解説: 接続助詞「て」は主語が変わりにくい。「ば」「ど」「を」「に」は主語が変わりやすい(「をにはど」の法則)。これを意識するだけで主語の取り違えが激減する。

問8:本文中に「複数」の要素がないか、または「例外」がないかを確認する

- 解説: 誤選択肢の定番は「限定しすぎること」だ。本文に「～ども(複数)」とあれば、「～だけ(単数)」とする選択肢は誤りとなる。

問9: 鎌倉時代／住吉物語(または『わが身にたどる姫君』など)

- 解説: 説話集である『宇治拾遺物語』は鎌倉初期。平安時代の『源氏物語』を模倣して作られた物語を「擬古物語」と呼び、鎌倉時代に流行した。

問10: 短編集

- 解説: 長編が多い王朝物語の中で、十編の短編を収めた珍しい形式の物語。これも文学史の基礎知識だ。

【練習問題②】

第1部：文法・重要表現の識別

問1：接続助詞「～ものから」の意味

「のたまふものから(おっしゃるもの)」のように使われる接続助詞「ものから」は、文脈上どのような関係(順接・逆接など)を表すことが多いか答えよ。

問2：打消推量の二重否定

「などかながらむ(どうしてないことがあろうか)」という表現において、最終的に筆者が伝えたいニュアンスは「ある」のか「ない」のか、どちらか答えよ。

問3：限定の表現「さらでは」

「さらでは、何なるまじき……(それ以外には、何ということもない……)」というフレーズに含まれる「さらでは」を現代語訳せよ。

第2部：重要単語

問4：「あやし」

センテンス「あやしの者ども」において、

単語「あやし」で考えられる、ふたつの意味をそれぞれ答えよ。

問5：「かたじけなし」

文中に「おはしまししもかたじけなき」とあったが、「かたじけなし」が持つ「恐れ多い」以外のポジティブな意味を答えよ。

問6：「かまへて」の意味

文中の「かまへて、いかにまれ、たばかり給へ」のように、命令・意志の表現を伴う場合の「かまへて」の意味を答えよ。

第3部：読解・人物特定

問7：謙譲語の受け手

「具し奉りて来む(お連れ申し上げよう)」という表現で、謙譲語「奉る」が使われている場合、その動作を受ける(高められている)のは誰か。「行く人」か「連れられる人」か答えよ。

【練習問題②の解説】

問1: 逆接(～ものの、～けれども)

- 解説: 「ものから」「ものの」「ものゆゑ」はすべて逆接の確定条件として機能する。これを知っているだけで、前後の文脈のねじれを即座に把握できる。

問2: ある(強い肯定)

- 解説: 「などか～(否定語)十らむ」は反語的に機能し、「どうして～ないだろうか、いや、あるはずだ」という強い肯定の意味になる。二重否定の形を見たら、肯定に変換して読むのが鉄則だ。

問3: それ以外には、そうでなくては

- 解説: 「さ(副詞)十あら(ラ変・未然)十ず(打消・連用)十は」が語源だ。「それ以外には」という限定のニュアンスで長文に登場する。

問4: 身分: 卑しい、みすばらしい／不思議: 不思議だ、変だ

- 解説: 漢字で「賤し」と書くか「怪し」と書くかの違いだ。今回は「者ども」に繋がっているため、身分が低いという意味で取るのが正解だ。

問5: もったいない、ありがたい

- 解説: 相手の厚意に対して、自分が受けるには「恐れ多い」と感じることから、「ありがたい」という感謝の意味に転じる。文脈判断の重要な語だ。

問6: 心して、必ず(ぜひとも)

- 解説: 「かまへて」は後に続く言葉によって意味が変わる。命令・意志なら「必ず」、打消(ず・まじ)なら「決して」となる。呼応の副詞としてセットで覚えよう。

問7: 連れられる人(動作の対象者)

- 解説: 謙譲語は「動作の受け手(客体)」を高める。この場合は「連れて行かれる対象(一品宮)」が敬意の対象となる。